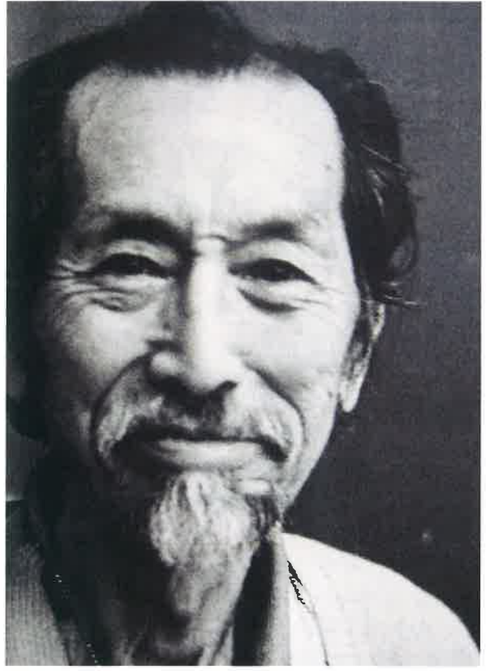


吉田堅治 ©KOZO

《SAMURAI》1978年　鶴岡八幡宮蔵

《La Vie》1994年　鶴岡八幡宮蔵

吉田さんと出会って…

洋画家　日浅和美

1970年10月、パリに行ったらこの人を訪ねるようにと言われ、吉田さんの住所を携えて日本を後にしました。船と汽車による1週間の長旅の末、やっとの思いでパリの東駅に辿り着きました。さっそくにも訪ねてみたところ彫刻の仕事のため南仏に出かけていました。結局初めてお会いできたのは2か月後のことで、以来先を行く作家として、また人として生涯を通じて多くのことを教えられることになりました。

大阪万博のあった1970年は、お金はなくても好奇心だけは一杯の若者たちが外国に目を向け始めた時でした。1960年代にすでに渡仏していた吉田さんのアトリエ兼住居には、大きな夢と希望を持ち、恐れを知らない若者たちが訪ねてきていました。画家、彫刻家、音楽家、詩人、文学者、医者、科学者、デザイナーといったいろんなジャンルで名のある人もない人も入り混じって集まってきていたのです。

その日の仕事を終えると、友がその友を連れだってよくやってきました。70年代に吉田さんのアトリエの扉をたたいた人は夥しく多く、そこを知らない日本人はもぐりとさえ言われる程開放的になっていました。扉を開けるとすぐ台所があってガス台の上にはいつも湯気を立てている大鍋がありました。その中身のメインとなっているのはキャベツで、その時々の訪問者の懐具合によって魚とか肉、野菜といった気まぐれな内容で、いわばチャンコ風闇鍋という感じでした。

毎日何本も空になっていくブドウ酒は吉田さんが日課のように補充していました。特にあの頃は決まってコート・ド・プロヴァンスの安いローゼを飲み、鍋をつつきながらその日にあった事、安アパートの情報、将来の夢、そして最後にはきまって芸術談議に花を咲かせるというのが何よりの楽しみになっていました。

当時は今では考えられない程日本が遠く、自分達が遠い異国にいるという事を実感していました。孤独をどこかで楽しみながらも、ふと訪れる淋しさの中で、仕事のこと、異邦人として生きること、故郷のことなど夜を徹して話し合ったものでした。最年長で経験豊かで、元教育者としての情熱を持ち続けていたサロンの主でもある吉田さんがそのまとめ役をしていたのです。思い返しても随分と豊かで、贅沢なパリでの時間と空間を提供してくれていたんだと有難い気持ちになります。

吉田さんの扉はいつも開放されていたのですが、ひたむきに生きていこうとしている者以外は何か入りがたい目に見えぬ扉があるのを感じていました。夜も更けて帰る我々が階下に着いた頃いつもアトリエの窓を開け、いつまでも手を振り続けていた逆光の中の吉田さんの黒いシルエットが心に焼き付いています。暗闇の中を手探りで生きる未知の国での不安でくじけそうな中に、何とも言えぬ温かいものをそんな時に感じて、頑張らなきゃと心に言い聞かせたものです。

仕事においては孤高の作家でした。でも対ヒトとなると、人好きで出会った人のことをほっておけない優しさと面倒見のいいところがありながらも、細い体の中にビリビリと張った作家としての研ぎ澄まされた感性を持ち、理不尽な事にはいつも怒る激しいエネルギーがありました。立ち止まってはいけない、立ち止まることは後退することだと、よく言っていたものです。

吉田さんという人は荒れた野に吹く風に向かって立ち向かうサムライの魂を持ち続けた人でした。

（2015年5月　巴里にて）

次回展覧会　2015年8月30日（日）～10月18日（日）

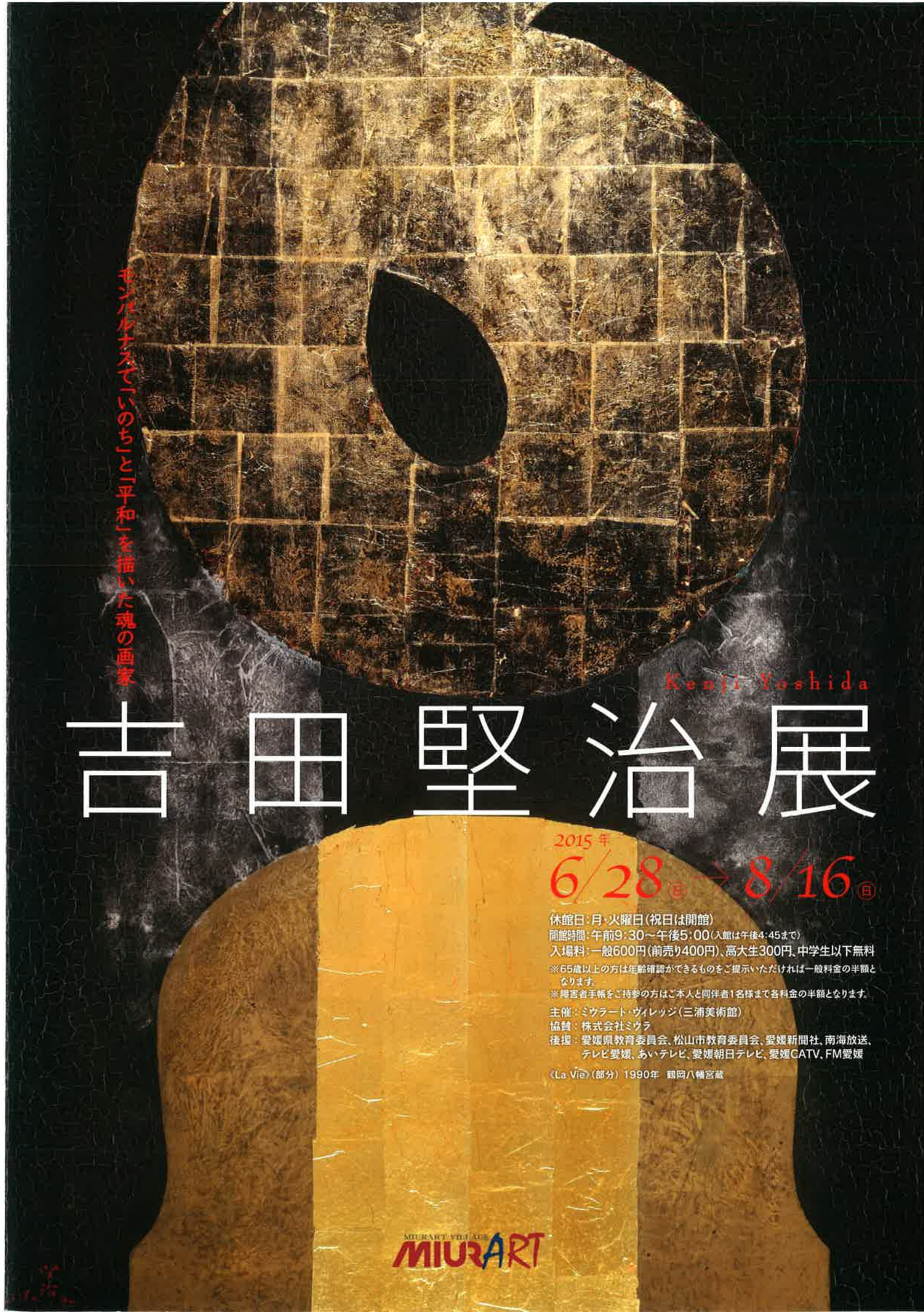
新進気鋭の中国人女流画家が墨彩画で日本の祭りを描く

傅益瑶 日本の祭り絵展（墨彩画）

公共の交通機関をご利用の場合
◆JR松山駅より市内電車にて松山市駅へ、伊予鉄バス北条行き「内宮バス停」、又は「花見橋バス停」下車 徒歩約10分
◆松山空港より車で約30分

MIURART VILLAGE
MIURART
ミウラート・ヴィレッジ（三浦美術館）
〒799-2651愛媛県松山市堀江町1165-1
TEL089-978-6838　FAX089-978-0323
http://www.miuraz.co.jp/miurart
E-mail:miurart@miuraz.co.jp

駐車場：30台と 休日は臨時駐車場（三浦工業福角駐車場約250台）をご利用いただけます。

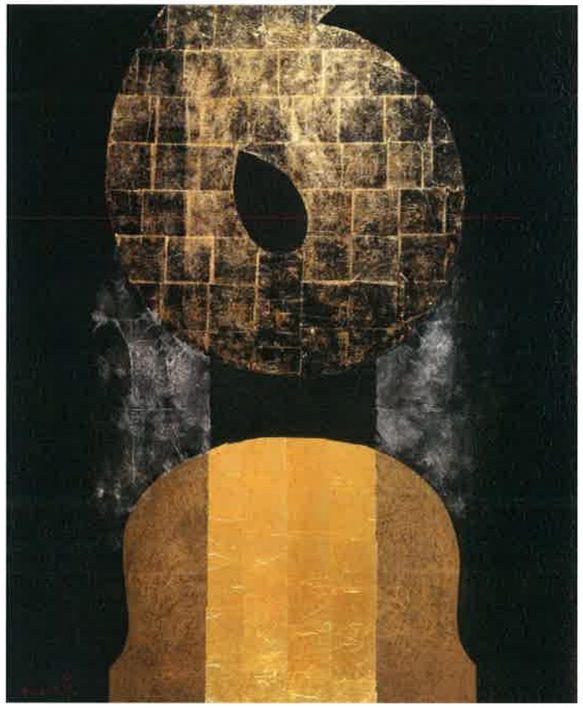


この度、ミウラート・ヴィレッジでは、『モンパルナスで「いのち」と「平和」を描いた魂の画家　吉田堅治展』を開催いたします。

生と死を見つめた画家・吉田堅治（1924-2009、大阪出身）は特攻隊の生き残りとして、絵を通して生命の尊さを訴えながら世界平和のために尽くすことを決意し、生命をテーマとした作品を描き続けました。

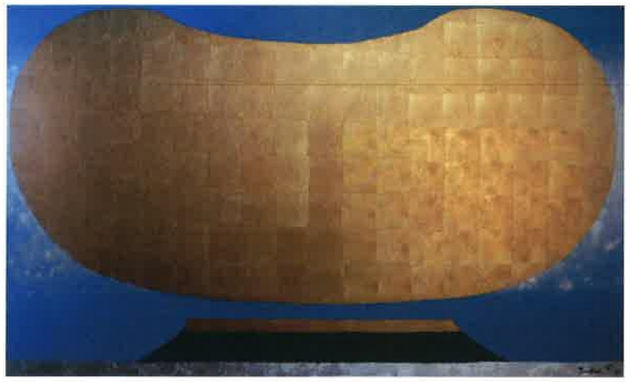
小学校教員をしていた吉田堅治は1964年、40歳の時に辞職しパリに渡り、日本へは数える程しか帰らずに制作活動を行いました。そして今もパリに眠っています。

存命中の日本人画家として初めて大英博物館で個展を開き、英国の大聖堂、パリのユネスコ本部でも個展を開催するなど、欧米では「魂の画家」と呼ばれ、吉田の作品は広く受け入れられていますが、まだ日本での顕彰は十分とは言えません。2011年にNHKで「生命（inochi）～孤高の画家　吉田堅治」という番組が放映されましたが、ふたたび当館にて吉田堅治の、金箔、銀箔を用いて描かれたきらびやかで大胆な構図の抽象画作品を中心に展示し、吉田堅治の精神世界に迫ります。


《La Vie》1990年　鶴岡八幡宮蔵

《La Vie》1987年　鶴岡八幡宮蔵

《La Vie》1987年　個人蔵


《La Vie》1995年　個人蔵

《La Vie》1997年　鶴岡八幡宮蔵

《La Vie》1991年　個人蔵

20世紀を代表する偉大な宗教画家

元大英博物館日本美術部長　ローレンス・スミス

吉田の作品に深く感銘させられたことの理由は、他に類をみない誰とも似つかぬその独自性である。吉田はコスモス（宇宙）を描こうとしている。それはまさに宇宙そのものを描こうとしている。他の芸術家もこれらのテーマを試みる者がいるが、数少ないだろう。恐らくヴァン・ゴッホなどの作品の中にも、このような傾向は見出せると思うが、抽象的表現に意味を求める芸術家は総体的に生命とは何かの問いを求め、純粋に抽象画へと向かうようである。

吉田は同時代のいかなる芸術家とも比較できないであろう。誰にも似通っていないからである。一つの理由として、ある美術評論家の以下のような指摘が思い起こされる。

吉田は新表現主義芸術家（1960年から1970年代の新芸術主義）か否か、また何か別の表現主義者か。しかしながら、どのジャンルにも当てはめることが出来ない。いかなるカテゴリーにも属さないからである。

吉田とは？ 彼を何と呼べばいいのだろう。戦前は、多くの画家たちが世界を旅したものだった。しかし、吉田の時代はこの夢は許されなかった。戦後しばらくして海外への旅が許されるようになってからは、多くの若者が世界へ旅立って世界情勢、芸術を見聞したいという願望を抱いていた。

1950年代の後半から60年代にかけて、例えば後に著名になった菅井汲がいるように、吉田も同時期、渡仏した画家の一人であった。

1964年からパリ生活が始まり、エッティングやプリント制作のテクニックをスタンレイ・ヘイターから「アトリエ17」で学ぶ。自己表現の更なる進化のために吉田は大変な努力をした。

ちょうどこの頃、吉田は自分は何を表現したいのかを認識しはじめる。それは具象ではないが、黒をとりまく何かの形、花でも星でも何でもよいが描くということであった。黒という色の中から光を見つけ出したいということである。黒は彼自身であり、原点であり、そこからの表現を模索し始めたのである。

吉田の作品には、神道からの影響があると思う。日本仏教も元々神道から生まれたものであるから、望んだか否かは別として本質的にもっているものであろう。

神道では森羅万象に神性、魂が宿るとしている。吉田は長い間のフランスという外国生活の中で、神道、仏教の神々はキリスト教、イスラム教の神々と同一であるという見方をしてきた。

吉田が描きたいという深い願望は、彼の今まで見てきた、そして感じてきたものの、不思議さ、神秘さに根本的な誘因（原動）があると思う。私は彼が20世紀を代表する偉大な宗教画家の一人であると思う。彼の絵の空間はどんどん広がり続けている。日本の絵の伝統的な巻物の手法で、右から左へと動いている。

吉田は強烈な個性の持ち主で、彼の絵を見ればすぐわかる。その絵は実に美しく感動的でさえある。

2011年7月31日発行　『魂の画家 光の画家 吉田堅治画伯』より